九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フランスで黒人であること : レオノーラ・ミアノ『消えた星のように』を中心に

元木, 淳子
法政大学理工学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/1563574

出版情報：Stella. 34, pp.251-271, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

フランスで黒人であること
――レオノーラ・ミアノ『消えた星のように』を中心に――

元　木　淳　子

レオノーラ・ミアノ（1973年生まれ）は，フランス語で書くカメルーン出身の女性作家である。1991年の留学以来フランスに在住し，大学でアフリカ系アメリカ人作家の英語文学を学んだのち，2005年に，アフリカ内戦の悲劇を描いた小説『夜の内側』[1]を発表した。その後，『来るべき日の輪郭』(2006年，高校生ゴンクール賞)[2]，『深紅の夜明け』(2009年，アフリカ・カリブ芸術杯賞)[3]を世に問うてアフリカ3部作とした。2013年には，奴隷貿易の淵源を描いた『影の季節』[4]でフェミナ賞を受賞した。これらアフリカ・シリーズを通じて作家は，奴隷貿易から植民地支配をへて今日に至る大陸の歴史との関連において，現代アフリカの問題を捉えようとしてきた。

他方でミアノは，現代フランスの黒人を表象しようとする作家でもある。ミアノの定義によれば，黒人とは，血統がサブサハラ（＝サハラ以南）のアフリカに結ばれている人をいう[5]。「フランスの黒い現実」と題する2011年の講演において，ミアノは次のように述べている――「フランスに黒人がいるのはもちろんだが，黒人のフランス人が存在する。だが，21世紀のヘキサゴンで作られた文学や映画には，黒人はフランス人としては表象されず，移民として，とりわけ不法移民として描かれるのみだ。白人作家の作品では，黒人はつねに苦境にある外国人として表象されている。それゆえ，フランスにおける黒人の生を知らしめることが自分の務めと考えている」[6]。

このような問題意識の下で，ミアノは2008年に小説『消えた星のように』[7]と短編集『アフロピアン・ソウル』[8]を発表した。その後，小説『エリーズのためのブルース』(2010年，『エル』読者大賞)[9]，『これら悲しき魂』(2011)[10]などで，フランスの黒人というテーマを追い続けている。

さて，『消えた星のように』と短編集『アフロピアン・ソウル』の表題作「ア

フロピアン・ソウル」は，「ケミット Kémite」というアイデンティティを主題とした点で，後続作品に対して独自の位置を占めている。作家がこのテーマをフランス・シリーズの出発点において取り上げたのはなぜか。ケミットは「サブサハリアン Subsaharien」，「アフロデサンダン Afrodescendant」，「アフロディアスポラ Afrodiaspora」[11]，「アフロピアン Afropéen」[12] といった自己認識とどのように交差するのか。これらを考察するのが本稿の目的である。以下では，『消えた星のように』と「アフロピアン・ソウル」において，登場人物がケミット意識に対していかなる反応を示しているのかを跡づける。ついで，ミアノがフランスにおける黒人のアイデンティティをどのように展望しているのかを検討しよう。

Ⅰ．小説『消えた星のように』

１．登場人物

小説は５つの章から構成され，プロローグとエピローグが配されている。本文はフランス語で書かれているが，各章の見出しには英語のジャズ・タイトルが与えられている。本文にはカメルーンのドゥアラ語や仏英混成語のフラングレも混じる。

時代設定は現代で，舞台はパリを思わせるものの，具体的な地名は記されていない。フランスは「北 le Nord」，「バビロン Babylone」，首都パリは「イントラムロス l'intra muros」，アフリカは「母なる地 la Terre Mère」，「大陸 le Continent」，フランス海外県は「海辺 la côte」，アメリカ合衆国は「大西洋の向こう outre-Atlantique」などと表現される。

物語の主要人物は３人で，それぞれアモック（Amok），アマンジャ（Amandla），シュラプネ ル（Shrapnel）という象徴的な名が与えられている。アモックは，アパルトヘイトの悲劇を描いた映画「アモック！」と同名で「狂気」を意味し，アマンジャは，反アパルトヘイト運動のスローガン で「人民に力を！」を意味する。シュラプネルの名は榴散弾の考案者からとられている。みな 30 歳前後で，北の首都で働いている。アモックとシュラプネルはカメルーンを想起させる国の出身で，高校以来の友人同士。アマンジャは「海辺」出身の女性である。

富裕な一族に生まれたアモックは，家庭的には恵まれなかった。彼は，祖父が植民地時代に独立派を弾圧した対仏協力者であったことに強い負い目を感じ

ている。商人の父は社会的評価こそ高かったが，家では妻に暴力をふるい，それをひた隠しにする妻は，代償として息子のアモックを虐待した。彼は非行少年となり，名門私立校から公立校に転校を余儀なくされるが，転校先で唯一無二の親友となるシュラプネルと出会う。その後，家族から逃れるために北に留学して財政学を学び，多国籍企業のコールセンターで働き始める。白人大学生には単なるアルバイトだが，有色の若者にとっては得がたい働き口だ。電話セールスをして弱者から金を絞るような仕事にやりがいはないが，大陸に家族がいるかぎり帰国するつもりもなく，都心の中流地区でひっそりと暮らしている。

シュラプネルは両親を早くに亡くし，祖母に育てられた。祖母は村落共同体が森に移動してきた歴史や，共同体のシンボルである「シャバカ Shabaka（＝生命の木）」の由来を孫に伝えた。祖母の死後，政府が森を北の開発業者に売り渡したため，住民は立ち退きを強いられ，シャバカも枯死してしまう。自分たちの生活を破壊する北の力の実態を知るために，シュラプネルは 北で学ぼうと考える。苦学して大学入学資格を得るが，留学のための資金も縁故もなく，結局大陸で働いて渡航費を蓄え，移民として北に渡った。2 つのホテルで働き，大陸の親族への送金と将来のための資金作りをしている。

アマンジャは両親の離婚後，母の手で育てられた。父は隣の英語圏の島の出身だった。母は大陸的な装身具を作っては北に売り生計を立てた。娘を手放しで愛そうとはせず，幼い頃のアマンジャは母に捨てられることを恐れていた。長じて大学で英語を学び，今は小さな出版社で配送助手のアルバイトをしている。

これら 3 人を結びつけるのが，「アトンの連帯 la Fraternité Atonienne」というケミットの団体である。

2．ケミットとはなにか

「ケミット」は古代エジプトの言葉で「黒人」を意味する。「ケメット Kemet」は「黒い土地」を意味し，古代エジプトの地を指すとされる。

1950 年代に，セネガルの歴史家・言語学者シェク・アンタ・ジョプが，ケミットなどの古代エジプト語の語彙研究を通じて，古代エジプト文明がバントゥ諸語を話すアフリカ黒人によって担われたものであるとする学説を発表した。

1970 年代に，アメリカ合衆国のアフリカ研究者モレフィ・アサンテらはシェクの研究に共鳴し，アフリカ中心性（afrocentricity）の理論を提唱した。アフ

リカの歴史をアフリカ人の視点から捉え直し再評価しようと主張するものだ。またこの時代には，古代エジプトの太陽神信仰や儀礼などを現代によみがえらせようとする宗教集団も登場している。

一方，カリブ地域においては，1920 年代のマーカス・ガーベイによるアフリカへの帰還の呼びかけは，1970 年代のボブ・マーリーから今日までラスタファリアンによって受け継がれている。彼らもまた，黒い土地を意味する「ケメット」が古代エジプトを指していたと考えている。

これら一連の流れを受けてフランスでも，エジプト学の立場から旧約聖書を読み直そうとするピエール・ニロンや，アフリカ中心性の立場から黒人の歴史を再構築しようとするジャン＝フィリップ・オモトゥンデらの宗教・思想運動が起こった。だが，フランスでケミットという表現が知られるようになったのは，主として 2000 年代のケミ・セバ（Kémi Séba）らによる政治活動に依る。

ケミ・セバは 1981 年ストラスブールに生まれた。両親はアフリカ出身である。「ケミ・セバ」は ペン・ネームで，古代エジプト語で「黒い星」を意味する。2000 年代に入って黒人至上主義を唱え，黒人と白人の分離を説いた。2002 年にケミット党を結成し，2004 年には，後述するイブラヒム少年事件で遺族の救援に当たるなどしたが，やがて党が人種融和主義だとして離脱した。新たに「トリビュ・カ」や「ケミ・セバ世代」などの団体を組織して，神秘主義的な政治運動を率いたが，「人種的憎悪をあおり，暴力を挑発する反ユダヤ主義団体」という理由で，行政命令により両組織とも解散させられている。2007 年に入ると，ケミ・セバはパンアフリカニズム・反帝国主義・反シオニスムを掲げ，人種差別の犠牲者のために戦うと宣言。2008 年にイスラム教に改宗して現代のマルコム X と称され，2010 年には新ブラックパンサー党のフランス語圏大臣となる。2013 年以降は，セネガルからメディアを通じて，後述するアフロデサンダンの大陸への帰還を訴えている。

3．「アトンの連帯」

小説『消えた星のように』では，ケミットは，大陸とディアスポラとを問わず「黒人」を示すと定義され，ケメットは，「本来古代エジプトを指すが，拡大してアフリカ全体を意味する言葉としても用いられている」［*TA*, 78］と説明されている。

アトンは古代エジプトの太陽神の名である。「アトンの連帯」の創設者はケリ・セシェタなる青年で，ケミットの苦しみを的確に言葉にする雄弁家である。団体は，北のケミットの権利拡大のために活動すると謳っている。そこに集う若者たちは，「（イントラムロスの）壁の外で囚われ，閉じ込められている」［*TA*, 121］という意識を抱いている。

シュラプネルとアマンジャは「アトンの連帯」の会員である。アモックは，行き場のない若者のエネルギーを団体がどのようにまとめているかに興味をもち，シュラプネルの誘いに応じて集会に参加した。

会場には，ケミットの国を象徴する金のジェド（記章）が置かれていた。冥界の王オサル（＝オシリス）の徳を表しているという。シュラプネルは，このジェドが今までどこにも帰属意識を持てなかった若者の心を捉えていることを喜ばしく思っている。会場にはマルコムＸのＴシャツを着ている者もいたが，彼らの顔に笑顔はない。アモックは，ここでは肌の色が重く，活動には個性がないと感じた。

「アトンの連帯」は，エジプトとナイル上流のヌビア地方がケミットの起源だとして，古代エジプトのヒエログリフをケミットのこどもたちに教えている。団体の指導者でカリブ出身のメイヘムは演壇に立ち，自分自身「再ケミット化」するためにメドゥ・ネテル（聖なる言葉＝古代エジプト語）を学び，父祖の足跡を何年もたどり続けたと語った。そして聴衆に向かって，ケミットとしてエジプト名に改名し，すべてを定義し直そう，偉大な父祖であり世界文明の創始者であるエジプト ＝ ヌビア人との絆を再確認しようとよびかけた。

ついでアマンジャが弁士として立ち，こどもたちを「ヘル（＝オサルの息子）の会」に送ろうと訴えた。会では北への統合・同化教育は行わない。こどもたちは自分が「黒い星」であると教えられ，親が遠ざけても会に通ってくると彼女は語った。

メイヘムは母語のクレオール語（créole）を言葉として認めていない。クレオリテ（créolité）も認めていない。クレオリテの主唱者たちは，何とかして自分たちが黒人（Nègre）であることを打ち止めにしたい輩だと彼は批判する。

だがシュラプネルはこれには同意できない。クレオールはサブサハラの言葉に非常に近い。奴隷として売られた人の余命が平均五年であった状況で，人々が生をつなぎ，クレオールという言葉を残したということ自体が，彼には尊い

ことに思われた。奴隷商人と奴隷との間の言葉であるクレオールを嫌悪し，古代の大陸に一挙に自分を結びつけたいというメイヘムの気持ちは理解できるものの，シュラプネルとしては，メイヘムが奴隷の子孫であることを恥じるのでなく，むしろ極限状況のなかで生き残った大陸出身の人々の子孫であることを誇るべきだと考えている。

また，シュラプネルは古代エジプト神への信仰やヒエログリフの教育にも同調できない。大陸出身の彼にとっては，シャバカや故郷の父祖の言葉こそが文化的アイデンティティの根なのだ。

またメイヘムは，北は神に背いて貪欲であったために今苦しんでいるのだと言う。そして，科学は細分化するが，ケミットは全体性を求めると主張する――「人は神に従うべきものだが，非ケミットは神に背いて科学を信奉している。科学と真実は同じではない。科学を警戒せよ，エイズは存在しない」［*TA*, 195］などと言う。また，団体は反同性愛・反白人を掲げ，排他的な極右傾向をもつ。

これに対してアモックは次のように考える。たしかに北は自分のエゴイズムを満足させるために自然と他者を傷つけてきた。だが，それは人種の問題ではなく人間の業であろう。したがって自分としては北に報復するつもりはない。ただ北に追いつくのでなく，北とは別の道を行くべきなのだ。具体的には，「植民地時代に大陸から略奪された富――北に奪われて，今，大陸のこどもたちが目にできない美術品など――を返還させる。鉱物資源などは大陸の提示する値で北に買わせ，北の手先たる指導者たちは北に引き取らせる。資本主義を返上して構造調整も受け入れない」［*TA*, 130］などの方策をとればよい。

この点についてはシュラプネルも同様で，サブサハラの民が自分の国で間借り人であることが問題だとする。国の資源を自分たちの手に取り戻せば，移民する必要もないのだ。

アモックはまた，集会で繰り広げられる反科学の議論にも賛成できない。同性愛についても，かつて多くの黒人国家がその快楽を禁じてはいたが，同性愛そのものは認めていたと認識している。

人種についてアモックは，差別がなくなれば肌の色は靴のサイズと同じことで，ただの差異にすぎなくなると考えている。これに対してシュラプネルは，北は相変わらず白い世界のままであり，ケミットはあくまでマイノリティで，

いまだにその存在を認められてはいないととらえている。ケミットは肌の色だけで定義され，個人として何を考えているかなどには全く関心を払われない。「（移民の）第3世代」「移民の出」といったレッテルを貼られるばかりで，ケミットはよるべき歴史も自らを指し示す名も持たない。このような状況下では，人種や肌の色に本質を見いだすことには意味があるとシュラプネルは考える。

だからこそ彼は，ディアスポラも含めた黒人の世界が北に存在するべきであり，ケミットたちのエネルギーをまとめる組織が必要だと考えている。そこで，イントラムロスに黒人文化複合施設のシャバカ会館を建てて，世界中のケミットが集う場にしようと構想し，資金として15万ユーロを蓄えてきた。

シュラプネルは，ケミットの運動が支配的なイントラムロスの東の地区で暮らしている。そこは「自分が王で，安全だと感じられる場所」［*TA*, 139］だ。だが彼は反白人主義者ではない。白人男性との交流はないが，金髪の白人女性には興味があり，さまざまな女友達と交際してきた。シュラプネルは，自分がヒエログリフの教育に同調できないことや，白人の女友達がいることが団体幹部に知られれば問題になると自覚している。

4．批判と擁護

アモックは，「アトンの連帯」で語られることは60年代以来の黒人ナショナリズムだと考える。エジプト＝ヌビアを先祖として褒め称える者たちはエリート主義者であり，別なるノルディスト（Nordiste）であって，サブサハリアンではないと知る――「彼らは分離主義を掲げてメトロポールにとどまり，白人へのとげであり続けている。そのかぎりにおいて，会はマージナルな存在に終わるだろう」［*TA*, 189］。

アマンジャの女友達のシャルは，ケミットの歴史には関心があるが，政治活動には興味がない。自身をブラックと定義して，ネグリチュードならぬブラキチュードは穏やかで，過去や傷や現実を超越するものだと考えている。シャルは，アマンジャとともに参加したシェク・アンタ・ジョプの催し会場で，「アトンの連帯」のメンバーがアンク（エジプト十字）を染め抜いた黒シャツ姿で宣伝ビラを撒くのを見て，「過激派」「分離主義者」「ファシズムの火付け人」［*TA*, 96］と呼び，警戒感をあらわにした。

アマンジャの方は，北がファシストの世界秩序を作っているのだから，これ

に異を唱える権利が会にもあるだろうと擁護する。彼女の生まれた土地は肌の色がすべての世界である。母は厳格な菜食主義のラスタファリアンで，ダホメのアマゾネスに因んでアリゴシと改名し，大陸への帰還を願ってきた。母は「北」が抑圧の都バビロンだと断じ，「白人はわたしたちを洗脳して，父祖の地から連行されてきたことをむしろ幸いだったと信じ込ませようとしている」［*TA*, 85］と非難してきた。母は娘に，オサルにとっての女神アセット（＝イシス）たれと教え，父祖の地の栄光を思い，カリブの島々に奴隷として捨てられた者たちの苦しみを胸に刻んで戦えと命じた。こうして母のすべてであるラスタはアマンジャの一部となった。娘は，資本主義を警戒せよとの母の教えを守って「バビロンを肥え太らせることのない程度に」［*TA*, 81］北で働いた。

アマンジャはケミットの歴史と未来を次のように考えている。バビロンの人間は，理論をふりかざすばかりで他人の立場に立ってものを考えることができない。そもそも生きるとは他人とともに成長することであって，バビロンのように他人の背中を踏みつけ，他人を乞食にまで貶めることではないはずだ。

ケミットは 1454 年，奴隷貿易を正当化するためにローマ教皇が「呪われたシャム」と公言した存在である。そもそもケミットの悲劇は，大陸から人々が移送され，家族が離散させられたことにある。16 世紀に大陸で国家が形成され始めた頃，外国が侵略してきた。「異人は人狩りを探検と呼び，野蛮を文明と呼んだのだ」［*TA*, 235］。奴隷貿易が行われていた 4 世紀もの間，大西洋はケミットの墓場だった。そして，あろうことか移送されてきた者はついに大陸のケミットを嫌悪するに到ったのだ。

つづく植民地化も他者への共感から行われたものでは断じてない。植民地化は，奴隷貿易がもたらした結果を大陸にも及ぼすものだった。北で「解放」された奴隷も，大陸で被植民地人となった者も同じ立場にされてしまった。そして植民地支配の後に大陸に生まれた諸国家はというと，バビロンのコピーにすぎない。諸国独立は，当時生成されつつあった連邦化の機運を打ち砕き，結局自力では発展できない国の形骸だけが残ったのである。今や奴隷制は巧妙にその姿を変えた。グローバル化はプランテーションの世界化と同義だ。

アマンジャの島の人々は大陸への望みも持てず，白人の神に帰依してさまよっている。他者を破壊する人種差別に憎しみなく向き合うには，自分のなかに統一を打ち立てなくてはならない。だが数世紀にわたってヨーロッパが黒人

のステレオタイプを流布しつづけた結果，ケミット自身がそれを内面化してしまった。ケミットは己を卑下し，抑圧者の論理を受け入れているのだ。ケミットのこどもたちも，奴隷制と植民地支配のなかで滅んでいった人々の生まれ変わりであるのに，バビロンの教育のなかで，他者の言葉で，他者の歴史を教えられ，自分は無能力だという意識を植えつけられている。同化は白人コンプレックスをさらに重症化させた。したがって，こどもたちに自尊心を回復させる教育を施さねばならない。

ところで，バビロンでケミットの企業を立ち上げ，ケミットを雇用することが問題の解決にはならない。北にケミットの居場所はない。黒人の親は，ここは白人社会なのだから警官に注意せよといった分裂症的な教育をこどもに与えねばならないのだ。ゆえに，北における密入国者救援運動は空しい。大陸の発展なくして大陸への蔑視は消えないのだから，ディアスポラのケミットはすべからく大陸に戻り，彼の地に投資すべきである。

このようなアマンジャの理想は，ケミットだけの大陸に住み，大陸の男性と家庭を持ち，こどもを育て，心の平安を得ることだ。だがアマンジャは，団体幹部らには建前とは裏腹に大陸に帰還する意志がないことを見抜いている。

5．アイデンティティの危機

登場人物たちは，それぞれが新しい人間関係を築こうとするなかでアイデンティティの危機を迎える。他者と深く関わることは，自分自身の殻を破り，他者と向き合うことを迫るものだからだ。

アモックとアマンジャは集会で出会って恋に落ちる。アモックはこれまで女性関係で深入りすることを避けてきたが，思いがけなく黒人ナショナリストに惹かれてうろたえる。一方アマンジャは，「暗黒大陸」の闇を払いのけるために大陸で教育活動に従事しようと夢見はじめる。ヘルを抱いたアセットの方が，キリストを抱いたマリアより古いことを大陸のケミットたちに知らしめたいのだ。

アマンジャのような考えの人はサブサハラにも多くはないが，アモックは彼女を受け入れ，ふたりで生きようと決める。両者は互いのなかに自分の姿を見出すが，相違もまた明らかになってくる。こどもを望まないアモックと，家庭を持ちたいアマンジャとの間に溝が生じ，考え方のずれも現れる。たとえば，アマンジャはマーカス・ガーベイを黒いモーゼとして崇拝している。これに対

してアモックは，ガーベイの本心は北に黒人の居場所を作り，その王になることであって，アフリカへの帰還ではないと主張する。また，アモックは黒人ナショナリズムが不要になる時代が到来することを望んでいる。そもそもアマンジャが「アトンの連帯」に属することにも不賛成だ。

だがアマンジャに会を去る意志はない。イントラムロスで黒人のこどもが白人警官の銃弾を受けて死亡した時，この団体だけが遺族を助けたからだ。また，かつての黒人ナショナリズムは男性中心主義だったが，「アトンの連帯」ではアマンジャは幹部として認められている。それも彼女が会を支持する理由のひとつだ。

またアモックは，アフロディアスポラがサブサハリアンを馬鹿にしていると非難する。ディアスポラが自分たちの起源を古代エジプトとすることにこだわるのは，北がエジプト文明を賞賛してきたからだ。彼は，北の基準に踊らされるのは愚かなことだと主張する。

ふたりは互いのこども時代について語り合うが，アモックは自分の階級については伏せている。「アマンジャは肌色に，アモックは家名に支配されている」［*TA*, 265］のだ。また彼女は，アモックの消極的な生き方に対して，孤独の殻にとじこもるのはケミットではないと 批判する。

アモックには大陸と北を往来しているアジャールという妹がいる。アマンジャを紹介された妹は，ブラックパンサーとつきあって親を殺されたらどうすると兄をからかう。兄とは違って，アジャールは自分の一族を誇りに思っている。両親が若い頃，新興国家のブルジョアには力も教養もあったが，今の大陸の若い富裕層は無能で，自分のような北帰りの人間に不信の目を向けるとアジャールは嘆く。

一方，シュラプネルは北で羽振りが利かず，ケミットの女性からは相手にされない。ただ，北に来た当初知り合った大陸出身の女性とのあいだにこどもがひとりいる。北での身分が保障されると考え，こどもは認知した。月に一度息子に会っているが，父親としてどうふるまえばいいか分からない。相手の女性はシュラプネルには何も期待せず，シングルマザーとして生きている。

これに対して，シュラプネルは大陸に関心のある白人女性たちにかしづかれてきた。彼女たちは彼の夢を理解し，大陸の料理も用意してくれたので，北の環境は，シュラプネルにとって大陸と根本的に変わるところはなく，真の意味

での異文化の世界ではなかった。

ところが，新しい女友達のガブリエルは大陸には興味がなく，ただ一個の人間としてシュラプネルとつき合おうとする白人女性だった。彼は元来，女は男の所有物だと考えてきたが，彼女と出会ってはじめて，自分が選ばれたという感覚を体験する。肌の色が個人を決定する唯一の指標でないことを示されたシュラプネルは，とまどいながらも相手の異文化を経験し始める。北の黒人世界で充足していた男が，ついに外部の世界に踏み出したのだった。やがて彼は，女友達の先祖が植民地で何をしてきたかは関係ないと考え始め，はじめて「アトンの連帯」のクワンザ［*TA*, 223］[13] に参加することを忘れた。この自身の変化に不安を感じ始めた矢先，街でガブリエルと連れ立っていたところをメイヘムと鉢合わせする。あくまでも白人女性の連れを無視しようとするメイヘムにシュラプネルは殴りかかり，その結果，裏切り者と烙印を押され，シャバカ会館計画も水泡に帰した。その直後，シュラプネルは謎の死を遂げる。

6．別 離

シュラプネルの身体から魂が離れ，高所から自分の亡骸を見下ろしている。アモックが恋人の腕のなかでくずおれ，シャバカが二度切り倒されたようだと嘆いていた。遠くから息子を眺めながらシュラプネルは，「神は黒人を愛していない。だれより多く祈ってきた黒人が，最後まで踏みつけられている」［*TA*, 340］と思う。そして死者が生者に話しかける方法は向こうの世界で学ぶものだと知る。

少年の姿をした霊的存在が現れてラス（Ras）と名乗り，シュラプネルが絶対的無力の状態にあると告げる。「振り向かずまっすぐに進まなければ，神に出会えない。下を見れば己の無力さに立ちすくみ，再生できない」［*TA*, 344］と教える。シュラプネルの前で多くの魂がスローガンを叫び，夢を語っていた。アフリカ合州国を説く者も，サンカラらしき人物もいた。これら黒人の英雄たちの間を通り抜ければ，生者のもとに自分の声を届けられる。だが，シュラプネルはアモックの叫びに涙し，ガブリエルの喚く声を聞いて振り向いた。そして，泣き叫ぶ人々のなかに落ちていった。

親友の死の知らせを受けたアモックは，アマンジャとともに大陸に戻り，貧しい友の家族にかわって葬儀を出す。彼女はケミットばかりの大陸をはじめて

目にして感激するとともに，人々が貧しさに打ちのめされている姿に衝撃を受ける。アモックの父は母と別居して田舎で隠居生活を送っている。母はというと，息子を手元に引き留めておきたくて，カリブ出身のアマンジャが自宅に逗留することを受け入れた。葬儀後もアマンジャは大陸に残りたいと思ったが，アモックにその意志はない。親友を失った彼は人生に意味が見いだせなくなり，彼女に生活をともにしようとも申し出られなくなっていた。

結局ふたりは北に戻り，その後疎遠になる。アマンジャは出版社をやめ，アモックとも別れて単身大陸に渡り，学校を建てようと計画する。だが，出発を目前にして，母が倒れたとの知らせが入るのだった……。

Ⅱ.「アフロピアン・ソウル」

『消えた星のように』において，アマンジャが「アトンの連帯」を支持するひとつの理由は，団体が黒人少年の遺族を救援したことにあったが，この同じエピソードを主題にしたのが短篇「アフロピアン・ソウル」である。2 作品に共通する挿話は，前述した 2004 年のイブラヒム少年事件をモデルにしている。白人警官が自室で手入れをしていた銃が暴発し，弾が集合住宅の壁を突き抜けて，隣室の黒人少年が犠牲になった。事件は当初マスメディアでは報じられず，ケミット党が遺族の救援にあたった。以下では「アフロピアン・ソウル」においてイブラヒム事件がどのように扱われているのかを検討しよう。

舞台は現代のパリ。語り手は登場人物の背後にあって事の次第を客観的に語る。主人公は「彼，il」とのみ表わされ，名前を持たない。大学卒業後，電話オペレーターとして働いている。「彼」はフランスに生まれた黒人で，自分自身を「アフロピアン」，すなわちアフリカに祖先を持つヨーロッパ人だと考えている［*TA*, 53］。「彼」はこれまでアイデンティティは複数のものだと思っていたが，現今の社会は，単一のナショナル・アイデンティティを求める方向に動いている。このような風潮のなか，人種差別を自ら体験するに至ってはじめて，彼は黒人ナショナリストのデモに参加する。白人警官の銃が暴発し，隣家の黒人少年アブバカルが死亡。肌の色のためか，事件は報じられない。憤った「過激な組織」が「ケメットの息子たち Fils de Kemet」［*TA*, 60］にデモへの参加を呼びかけたのだった。

遺族を囲む若者たちはエジプト学に傾倒し，アンクを染め抜いたTシャツを着ていた。それが彼にはマルコムXの映画の一場面のように見える。男児の遺族と少ないデモ参加者は，パリの貧困地区を行進していく。白人もちらほらいたが，彼らを植民者の子孫だとして威圧する空気がデモ隊に満ちていた。彼自身は，これまでデモの若者たちのような気持を抱いたことはなかった。極貧に苦しんだわけではなく，両親は彼を十分養い，教育も受けさせてくれた。機会あるごとにアフリカに連れて行かれたが，そのたびに彼は自分をフランスに生まれたフランス人だと感じてきた。国家の栄光を称えるのは戦争に導く思想であり，ナショナリズムは地獄への道だと思っている。アフリカでも富者が貧者を虐げていて，神秘の地でも理想郷でもない。そう考える彼は自分をケメットの息子だと思うこともなかった。

デモの終りで少年の父が支援者に謝意を表し，アフリカで葬式を出したいと願う自分たちを彼らだけが助けてくれたと述べた。すると，ケミットの大義のために闘うと宣言する若者が，男児の死は事故でなく殺人だと断じ，「今こそ目には目を。全世界の黒人の惨状を思い起こし，黒人諸国家を打ち立てるときだ」［*TA*, 67］と扇動した。

「彼」は「過激主義はみな同じだ。知性よりも人の感情に訴えかけ，不安と恐怖をあおる。他者は敵だと切り捨てて自分の殻に閉じこもる方が，人に心を開くよりたやすい」［*idem*］と思う。アンクの人たちも自分と同様に，フランスの外で暮らしたことがないのだと彼は思う。彼らは，自分たちがフランスから何の恩恵も受けておらず，フランスには何の恩義もないと断言する必要を感じている。だが，それをこの国の言葉で語らねばならないのだ。彼らはまだこどもなのに，受け入れることも，許すことも，待つことも，もはや望んではいない。彼には彼らの心情は理解できた。だが，彼らの言葉にもやり方にも同調はできない。彼らの意趣返しは，その手中にある弱者に向けられるに違いなかった。強者は傷つかぬままだろう。

Ⅲ．作家のケミット評価

「アフロピアン・ソウル」の「彼」は世代，学歴，職歴，ケミットの運動に対する考え方などが『消えた星のように』のアモックと非常に近い。ただし「彼」

がフランス生まれのアフロピアンであるのに対して，アモックは大陸で生まれたアフリカ人移民である。しかも両作品の相違はそれだけではない。

「アフロピアン・ソウル」では，人種主義の脅威が感じられるフランスの社会情勢のなかで，アフロピアンと自己定義する「彼」が，自らをケミットと考える活動家たちとの心理的・思想的な遠近を測る。つまり表題のようにアフロピアン・ソウルをもつ主人公が，黒人少年の死に憤る同胞の呼びかけに共鳴しつつも，活動家の主張や手段には距離を置くという構造がうかがえる。いわば，ケミットの運動が部外者の目を通して外側から描かれるのである。

これに対して『消えた星のように』では，ケミットの運動が内側から描かれる。ここでは，北で生まれ育ったアフロピアンは主要な人物としては登場しない。アフロピアンという言葉自体も現れない。アモックとシュラプネルはサブサハリアンの移民である。アマンジャはフランス黒人ではあるが「ウルトラマリヌ ultramarine」［*TA*, 83］で[14]，北で生まれたアフロピアンではない。「アトンの連帯」のメイヘムも海外県の出身で，「アフロピアン・ソウル」の活動家のようなフランス生まれではないのだ。つまり『消えた星のように』では，アフロピアンでない，カリブ出身のディアスポラが行うケミットの運動を，アフロピアンではない，サブサハリアンとウルトラマランたちがさまざまに評価するという構造をとる。アフロピアンの存在は完全に抜きとられているのだ。

したがって，『消えた星のように』と「アフロピアン・ソウル」の両作品をあわせることで，フランスに暮らすさまざまな立場の黒人――サブサハリアン，アフロピアン，ケミットなどとそれぞれに自己定義する，アフリカ・カリブ系移民とフランス生まれの黒人――が，ケミットの運動をどのように評価しているかを総合する仕組みになっているのだ。

すでに見たように，『消えた星のように』で自らをサブサハリアンだと定義するアモックと，「アフロピアン・ソウル」で自らをアフロピアンだと定義する「彼」の間で，ケミットをめぐる考えはほぼ一致する。世代，学歴，職歴が似通うふたりのフランスの黒人青年は，その出身地によらず，ケミットの活動に対して相同の評価を下している。いうならば，アモックはアフロピアン・ソウルを持ったサブサハラ人といえよう。

ところで，アモックの出身や経歴などは作家の実人生に重なる部分が多い。またミアノは自身をサブサハラ人だと定義し，アフリカ人作家，アフリカ文学

に代えて，サブサハラ人作家（écrivain subsaharien），サブサハラ文学（littérature subsaharienne）という名称を提案する［*HF*, 33］。他方で，作家は2009年に「自分はアフロ＝オキシダンタル（Afro-occidentale）であり，アフリカか西洋かのどちらかを選ぶということはない」［*HF*, 26］とも発言している。作家もまた，アフロピアン・ソウルをもったサブサハラ人なのだ。したがって，『消えた星のように』のアモックのケミット運動への評価は，作家ミアノ自身のそれに重なるといえよう。

Ⅳ．執筆の動機

1．フランスの黒人

「フランスの黒人」というテーマについて，フランスの読者の関心は高いが，出版界や批評界は冷淡であるとミアノは言う。『夜の内側』をはじめとするアフリカ・シリーズの出版は順調だったが，フランス・シリーズは難航したらしい。後者のひとつである『エリーズのためのブルース』は読者の支持を得て，『エル』読者大賞を獲得したが，出版社側は，普遍的な人物が描かれていないとして当初刊行には難色を示していたという［*HF*, 72］。

『消えた星のように』の出版当時，あるフランスの白人ジャーナリストが作家に「なぜ小説を英語で書いて，アメリカで出版しないのか。フランスでは人種は問題にならない」と問うた。これに対してミアノは，2011年の講演で「自分は20年もフランスに暮らしているのに，まだフランスの黒人について書くことが許されないのか」［*HF*, 74］と嘆いている。

「アフロピアン・ソウル」の執筆について，ミアノは「フランスにおける黒人の経験を描いたものはこれまでほとんどなく，とりわけ今それが必要だ」［*AF*, 92］と語っている。2008年当時，出版界の逆風にあってもフランスの黒人について書くことがなぜ必要だったのか。

作家によれば，1990年代と2000年代ではアフリカ・カリブ系フランス人の意識に変化が見られるという。90年代の初頭，「黒人 noir」という表現は自称としても他称としても用いることがはばかられていたらしい。来仏当時のミアノは，フランス生まれの黒人の多くが，自身を定義する言葉を持たなかったことに驚いたと語っている。彼らにとって「フランス人 Français」とは「白人 Blanc」と同義語で，自分たちはカリブあるいはアフリカに帰属意識を持ってい

たというのだ［*HF*, 90］。

これに対して，2000 年代は「フランスで黒人であること noir en France」また「フランス黒人であること noir de France」を前面に出す時代になったという［*HF*, 91］。この現象の背景には，2001 年 9 月 11 日以降，全世界的に人種・民族・移民・宗教などの問題が焦点化されたことがあるだろう。2005 年，フランス社会は郊外移民地区の若者の暴動で揺れた。

1930 年代のパリで絶対的少数派であった黒人留学生・知識人が，ナチズムと人種主義の台頭に強い脅威を感じていたように，2000 年代の有色の若者も，肌の色が以前に増して警戒される風潮のなかで危機感を抱いている。この間の事情をミアノは次のように分析する――「かつて 1930 年代のパリで，アフリカ人とアンチル人の文学者・知識人が，被植民地人であり黒人であるという共通性のもとに連帯し，ネグリチュードの文学運動を起こしたのと同様，今日の若者世代も，フランスのアンチル人，フランスのアフリカ人としてではなく，フランスの黒人として声をあげようとしている。作家としてこの現象には興味を惹かれる。たしかに，カリブとサブサハラ出身の黒人の間にはある種の緊張がある。アンチル人には奴隷貿易のコラボに対する反感があり，サブサハラ人はアンチル人を奴隷の子孫だと軽んじる傾向がある。だがそれは，フランスで報道されるような黒人間の人種主義ではなく，家族内の諍いのたぐいのものだ。フランスで黒人であることを肯定し定義することから，新しい文化がはぐくまれるだろう」［*HF*, 65 / 69］。

2．アフロピアンという意識

このように，フランスにおいて黒人としての連帯意識が生まれる状況にあって，黒人であることの定義もさまざまに模索されてきた。ミアノは，2000 年代に入ってパンアフリカニズム，ラスタファリズム，アフリカ中心主義（afro-centricité），黒人ナショナリズムなどがフランスに現れたと述べている[15]。

ところでミアノによれば，一般にフランスは，その肌の色の如何によらず外国に祖先をもつ人を自国民としてなかなか受け入れない国だという。アフリカに祖先をもつ人たちは，自分自身フランスに生まれ，その両親もまたフランス生まれであっても，あいかわらず「移民の第 3 世代」などと呼ばれ，フランス人とは認められないというのだ［*HF*, 79］。

これに対して，フランスで生まれ育った黒人青年層のなかに，自分たちはフランス人である，フランスでは異邦人でないという意識が育まれているという。彼らにとってフランスは，もはや白人だけの国ではなく，自分たちの国でもあるというのだ。そして，白人が多数を占める社会で生きる黒人にとって，肌の色は個性の一部になるという［*HF*, 81 / 98］。

「アフロピアン・ソウル」が出版された当時，ジャーナリストから「アフロピアン」はミアノの造語かという質問がなされた。これに対して作家は，「90 年代からアートの分野などでこの言葉はすでに現れている。サブサハラの文化がヨーロッパに及ぼす影響を象徴する言葉として，トーキング・ヘッズらが用いた」［*HF*, 83］と答えている。このやりとりは，当時アフロピアンという言葉がフランス社会では十分に認知されていなかった事実を示している。

ミアノは言う――「2000 年代のフランス黒人で，アフロピアンとして自己定義する人たちは，サブサハラ・カリブかヨーロッパかのいずれかを選ぶことを拒否し，互いに影響し合うふたつの世界のどちらにも身を置くことで自己を開花させている。かつての引き裂かれの場を，今は変化の場としているのだ。ところで，サブサハラに祖先を持ち，ヨーロッパで生まれた人のなかには，自身をアフリカ人だと定義する人もいる。アンチルを起源とする人のなかには，自分をクレオールだという人も，アフロカリビアンだという人もいる。ただ，アフロピアンとして自己定義する人だけが，ヨーロッパと平和的な関係を結んでいるように思われる」［*HF*, 87］。

ところで，実生活においてミアノはフランスで娘を育てている。その娘を母はアフロピアンと定義する。「私は黒人女性であるだけでなく，若いアフロピアンの母でもある。娘がフランスで正当な存在と認められるよう，あらゆることを行う義務が私にはある」［*HF*, 74］と述べている。「書かれなければ存在しない」とミアノは言う。フランス黒人が非在であるかのようにみなされる社会にあって，アフロピアンの若者やサブサハラからの移民の生を書くことは，娘と自身の実生活にとって重要な課題だったといえる。娘の存在がミアノの創作の強い動機となっているのだ。

3．ケミットという意識

それでは，フランスの黒人・シリーズの第 1 弾となる作品において，ケミッ

ト党などがモデルとされたのはなぜか。前述の通り，作家はフランスで黒人意識が生成されつつあることを認めている。また，黒人の自己定義も複数あると分析している。ただし，すべてのアイデンティティを等しく認めているわけではない。

9.11 以降，フランス社会に人種主義や移民排斥の風潮が高まり，これに対する反動としてのケミ・セバらの極端な言辞が耳目を集めている。彼らの活動が，フランスの黒人全体に対する人種偏見をさらに助長する危険をはらんでいることは疑いえない。当時のミアノは，フランスに暮らすサブサハラ人作家として，またアフロピアン・アイデンティティに娘の未来を託す母親として，ケミ・セバらの活動に対する態度表明を緊急に行う必要を感じていたといえる。そのために，作家はそれぞれに異なる役割を担う 2 つの作品を公表したといえよう。

「アフロピアン・ソウル」においては，「アフロピアン」という当時としては耳新しい言葉を打ち出すことで，作家は，フランス黒人のうちで「アフロピアン」と自己定義して社会統合を肯定する人々の存在をアピールし，「ケミット」と自己定義して分離主義を押し出すグループと区別しようとした。すなわち，アフロピアンという外側の立場からケミットを描いたのだ。

だが他方で作家は，ケミットの運動を，特殊で危険な集団による，アフロピアンには理解不能な振る舞いとして全否定するものではない。それをもフランスの黒人の自己定義の一部として，可能な限り理解しようとするのだ。

それゆえに『消えた星のように』では，短編とは逆に，ケミットの運動が内側から語られるという仕掛けがほどこされている。ケミットの団体に関わる人物たちが，活動への情熱や違和感を内側からつぶさに語っていくのだ。

実際，作家はケミット党などの活動に対して一定の理解を表明している――「自分は起源など気にしていないから，誰がピラミッドを作ったかとか，文字があったかどうかなどを知りたいと思わない。だが，そうしたい人の気持ちは理解できる。ある社会のマイノリティが，自分の祖先が再評価される必要を感じることも理解できる。さらに，フランスにはアフリカ中心主義団体のほかに，カリブとアフリカの対立感情などについて黒人間で議論する場がない」[*HF*, 66 / 128-129] と述べている。小説では活動家たちの来歴や心情が非常に丁寧に描かれており，ミアノの最大限の理解が反映されているといえよう。だからこそ，『消えた星のように』は「反白人の小説か」との批判も受けたのだ [*HF*, 76]。

たしかにこのような評が現れるほど，小説ではケミット活動家の言い分が十全に開陳されている。

しかしながら，ケミットの活動家に対して最大限の理解を示しつつも，ミアノは彼らに肯定的な未来の展望を与えていない。世界規模での黒人の統一を図りたいと考えていたシュラプネルは，「アトンの連帯」の反白人主義と最終的には袂を分かつ。ガーベイズムの使徒であるアマンジャも，会から自立して単身で大陸へ帰還しようとする。アモックは会への批判的立場を変えることがない。結局，主要人物はみなケミットの会から離れていくのだ。

小説の題名のように，3人ともに北の空では「消えた星のように」輝きを放つことがない。さらに，「消えた星」は「黒い星」を意味するケミ・セバとその仲間たちをも暗示していよう。また，会ではこどもたちを「黒い星」と呼ぶというくだりがあるが，そこには黒いこどもの星たちも，はじめから消えた星なのだという作家の含意が読みとれる。小説は，北でケミットとして活動する若者たちの心情に寄り添いつつも，彼らの黒人至上主義は人々を袋小路に導くのみで，けっして肯定できないという作家の認識を表現しているのである。

おわりに

ミアノは，従来フランス語表現のサブサハラ人作家がアフロディアスポラに十分関心を示してこなかったと語り，ディアスポラを視野に入れた自身の仕事の独自性を主張している［*HF*, 120］。『消えた星のように』では，サブサハリアンとアフロディアスポラが旧大陸において出会い，フランスの黒人という新たな意識を形成していくさまを描いている。〈フランスの黒人〉という，サブサハラ人作家にとって新しいテーマにとり組むにあたって，ミアノはフランス社会で警戒されているケミットの運動をまっさきに取り上げた。そこには，フランスの黒人について書く以上，ケミット問題を避けては通れないという作家の危機意識がうかがえる。ただし，小説の目的はケミ・セバやケミット党そのものを描くことにはない。ケミ・セバを論じるならば当然言及されるべき，イスラムとの関係，反ユダヤ主義の問題などには触れられていないのだ。また，主要人物は移民だが，移民問題は中心的なテーマから外れている。作家はあくまでケミット党などをモデルにして，フランスの黒人のアイデンティティのあり

方を追求しているといえよう。そして，ケミットの運動が，自尊心の回復や歴史の再評価といった肯定的な側面を持ちながらも，他者との共存を拒む点で未来への展望をもたないことを明示した。さらに「アフロピアン・ソウル」では，アフロピアンの視点からケミットを描くことによって，一般にフランス黒人がケミットの運動をどのように位置づけているかを描こうとしたのである。

ところで，『消えた星のように』の扉には「複数の，境界のアイデンティティのために」と記されている。人は，出身地などの単一のアイデンティティに押し込められない存在だとミアノは考えている。個人は複数のアイデンティティの複合であり，他者と相互に影響し合い変化する主体である。エジプト＝ヌビアに黒人種の起源を求めるケミット思想に対して，ミアノは，複数の，絶えず変化する，相互浸透的な「境界のアイデンティティ identité frontalière」[*HF*, 120] [16] を対置する。登場人物たちは，他者と関わり，異文化に出会うことで，従来の自意識の境界を揺さぶられ，新しいアイデンティティの形成に進み出てゆく。単一の自己同一性で固めたはずのケミットのグループは，メンバーが複数のアイデンティティと関わって文化的雑種性（hybridité culturelle）を育んでいくなかで，内側から掘り崩されてゆくのだ。

時代とともにアイデンティティは変化し，間断なく新たな自己定義が生成される。2011 年の「アフリカ系の人々のための国際年」にあたって，ミアノは「フランスのアフロデサンダン」と題する講演を行い，アフロディアスポラという負の歴史を刻印した名称に代えて，アフロデサンダンという名称が，フランスの若い黒人知識人層の間で支持されつつあることを次のように報告している――「アフロデサンダンとは，サブサハラ以外で生まれ，サブサハラに祖先を持つ人の総称で，主体的には，アイデンティティの基礎をアフリカにおく人を指す。フランスの場合，大部分のアフロデサンダンはウルトラマランである。ただし，アフリカとの絆を肯定的に引き受けるウルトラマランの場合，アフロデサンダンよりアフロカリビアンと自称する人が多い」[*HF*, 117]。

『消えた星のように』では，ケミット活動家の心情は十全に描かれているが，その未来には救いがない。この救いのなさがケミット至上主義に対するミアノの最終的な審判といえる。『消えた星のように』でケミットの運動の不可能性を描ききった後，ミアノは続く『エリーズのためのブルース』などのフランス・シリーズで，アイデンティティの問題のみに縛られず，より自由に，多様に，恋

をし幸せを求めるアフロピアンの若者群像を描くことになるだろう。そこには，教育を受け，文化的雑種性を生き，アフリカ系アメリカ人の生活様式に影響を受ける青年たちが登場するのだ。

註

1）Léonora Miano, *L'Intérieur de la Nuit*, Paris : Plon, 2005.
2）Miano, *Contours du Jour qui vient*, Paris : Plon, 2006.
3）Miano, *Les Aubes écarlates*, Paris : Plon, 2009.
4）Miano, *La Saison de l'Ombre*, Paris : Grasset, 2013.
5）Miano, *Habiter la Frontière* [abrégé ensuite : *HF*], Paris : L'Arche, 2012, p. 118.
6）*HF*, p. 59.
7）Miano, *Tels des Astres éteints* [abrégé ensuite : *TA*], Paris : Plon, 2008.
8）Miano, *Afropean Soul* [abrégé ensuite : *AS*], Paris : Flammarion, 2008.
9）Miano, *Blues pour Élise*, Paris : Plon, 2010.
10）Miano, *Ces Âmes chagrines*, Paris : Plon, 2011.
11）奴隷貿易によってアフリカ大陸を離れ，アメリカ諸大陸・カリブ・ヨーロッパ諸地域に離散したアフリカ系の人々の総称。
12）フランス語の発音にしたがえば，「アフロペアン」と表記すべきだが，短編の英語タイトル *Afropean Soul* にしたがって，本稿では男女を問わず「アフロピアン」と表記する。
13）原注で「1960 年代アメリカ合衆国のクワンザが提唱した，アフリカ系の人々として新年を祝う行事」とされている。
14）「ウルトラマラン（ultramarin）あるいはドミアン（domien）は，フランス海外県の住人である」と原註で定義されている。
15）ミアノの公式サイト（www.leonoramiano.com）の『消えた星のように』解説。
16）« frontalière » には「国境」の意味も含まれている。